

二之宮遺跡、東新居遺跡、一ノ坪遺跡では灰釉陶器の出土割合が高いが、笠木地蔵遺跡、北堀遺跡、中田小学校遺跡では少ない傾向が見受けられる。また白磁は笠木地蔵遺跡、中田小学校遺跡、一ノ坪遺跡に見られる。いずれの住居址においても灰釉陶器は伴出していない。これは何らかの理由で灰釉陶器の搬入が絶たれ、それを契機に白磁の輸入陶磁器が九州博多方面からこの甲斐の国まで、急速に流入したものと思われる。その後急激にいわゆる六古窯なるものが勃興し、甲斐の陶器の世界はほとんどこの中の常滑、渥美、瀬戸、備前などが主流となり、輸入陶磁器は戦国時代の15世紀になってから、明の染付などが見られるようになる。輸入白磁などの研究は北九州の太宰府、博多周辺が出土量も多いことから、他地域の一つの指針となっている。中田小学校遺跡、一ノ坪遺跡出土の白磁碗はいずれも11世紀後半から12世紀初頭に位置づけられるものである。甲斐の国では永保3年（1083）富士山大噴火があり（扶桑略記）、康和2年（1100）僧寂円が写経を始めた（勝沼町白山平の経筒）頃にあたるが、鎌倉幕府成立後に比べると極端に文献史料の少ない時期である。この限れた時期に、最近の言葉でいえば、規制緩和、市場開放があって、爆発的に輸入陶磁器が流入したものと思われる。

この時期の土器編年については、坂本美夫氏による先駆的研究と近年資料の集積が図られた段階の森原明廣氏による研究がある。大方はこれらの研究の成果に負うところが多いのであるが、白磁を出土する住居址の組成に注目しながら、一ノ坪遺跡における見解をまとめておきたい。

白磁を出土する住居址は笠木地蔵遺跡1、2、25号住居址、中田小学校遺跡14号住居址、一ノ坪遺跡8号住居址である。それほど多い数ではないが、笠木地蔵遺跡1と25号住居址は底部破片であり、笠木地蔵遺跡2号住居址は口縁部破片、中田小学校遺跡14号住居址、一ノ坪遺跡8号住居址は口縁部から底部まで判明していおり、時期的にも一致するものであろう。特に笠木地蔵遺跡2号住居址は出土遺物も豊富でこの時期の標準資料となり得るものである。森原氏も指摘するようにこの時期から柱状高台杯、皿が登場してくるが、脚高高台の型式学的な変遷の中では捕らえられないものであり唐突な感じを与えるが、これは、上記の各遺跡ごとの組成からも支持されることである。

各遺跡の組成一覧表から、柱状高台杯のみで出土する場合、柱状高台杯と柱状高台皿が同時に出土する場合、柱状高台皿が出土する場合の組み合わせが考えられる。これを時間的変遷と捕らえ、白磁の様相を観察すれば、笠木地蔵遺跡1号住居址のものは、高台の畳付の部分が内側に削がれており、削がれないものより古い様相であるという編年観が得られる。そこで、柱状高台杯と白磁をもつ笠木地蔵遺跡1号住居址を仮に1段階とし、柱状高台杯と皿と白磁を持つ笠木地蔵遺跡2号住居址を2段階とし、柱状高台皿をもち白磁を失う東新居7号住居址を3段階としておき、後日全体的な時期設定を試みたい。

なお、塩山市域にはこの1段階から2段階にわたる時期に甲斐源氏の安田義定が笛吹川流域方面に勢力を拡大していた時期であり、『吾妻鏡』には安田義定らの活躍が記されている。それらを支えた農民らの住居は当遺跡にも見るような状況であり、木製什器が発達してきたと思われ、土器は前時期と比べると誠に貧弱な様相を示す。ところが、特別な様相を示さない一般農民の住居と思われる所から、中国製白磁が出土することから東アジアの経済圏の中には確実に組み込まれていたということもできるのである。

#### 参考文献

- 1 坂本美夫 1986 「甲斐国における古代末期の土器様相」『神奈川考古』23号神奈川考古同人会
- 2 森原明廣 1993 「山梨県地域における古代末期の土器様相——「甲斐型土器」の消滅とその後」『丘陵』14号甲斐丘陵考古学会
- 3 横田賢次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について——型式分類と編年を中心として——」『九州歴史資料館研究論集』4
- 4 山本信夫 1988 「北宗期貿易陶磁器の編年——太宰府出土例を中心として——」『貿易陶磁研究』8

## 第2節 11世紀から12世紀の日宗貿易について

9世紀から10世紀にかけての中国の動乱は中国の社会全体に大きな影響を与えた。唐代は、門閥貴族の力が強く、華やかな社会であったがこの動乱によって彼らは没落、変わって新興の地主階級が台頭してきた。

唐代から茶は盛んに栽培されるようになったが、一般庶民にはまだまだ手の届く代物ではなかった。茶はこれら貴族らの嗜好品として愛飲され、その茶器として用いられた「唐三彩」は色鮮やかで優雅さを感じさせるものであったが、性質的にはもろく耐久性に欠けていた。宋代にはいると、茶は高価なものではなくな

り庶民の間にも飲茶の習慣が広まっていった。そして、このころから盛んに作られるようになった青磁や白磁などの磁器は、この習慣と相まって陶磁器の生産を飛躍的に増大させることとなった。

一方、絹織物・漆器・紙・鉄・銀・銅などの生産も発展し、こうした産業の発達は、唐代以来すでに盛んとなっていた商業をますます大規模なものとするとともに対外貿易をも盛んにしていった。

中国の貿易機構については、唐代以降の公貿易はすべて、広州・揚州・泉州などに設置された市舶司（税関）を通過しなければならず、厳しい検査などを経て商船は出港していった。

日本ではこのような中国商船がもたらした「唐物」は非常に珍重され、官貿易またあるときは民間人の手によって交易され、日本各地に運ばれていった。日本の受け入れの仕組みについては、9世紀は、中国商船が当時唯一の開港地である博多津に寄港すると、その報を受けて政府は、「交易唐物使」を派遣し、積載貨物を検査したうえで先買権を行使し公貿易を行った。そして政府の買い上げ終了後に民間による交易が行われた。しかしこのシステムは中国商人にとって低価で買い上げられる上に、長期滞在を強いられるなどうまみにかけていた。一方日本の民間貿易側にとっても、いわゆる「余り物」を購入しなければならないなど、不満が多く、このシステムは9世紀末には崩壊し始める。そこで政府もこのような貿易統制規定を緩和することによって、10世紀代はおおむね維持された。しかし、11世紀にはいと唐物使派遣は停止（寛弘9、1012年）され、貿易管理権は太宰府に委譲、私貿易の形態に近づき、次第に荘園貿易が主導権を握るようになった。12世紀になると、前半では宋の8代皇帝が貿易振興策を積極的に押し進め、また国内では九州の寺社が海岸沿いに自己の荘園を確保し、不入権をいかして宋船を直接ここに入港させる荘園貿易が顕在化した。12世紀後半にいたるまで、日中貿易の担い手はあくまで中国商人であって日本人が中国へ赴くことはなかった。それは政府により海外渡航が禁止されていたからであるが、平清盛によって対外貿易は積極的に推進され、宋へ渡航するものがでてくる一方、瀬戸内海に宋船を積極的に受け入れ、開国的な方針がとられた。

晩唐から五代、北宋にかけて、中国からもたらされた、いわゆる輸入陶磁は越州窯青磁（浙江省）、長沙瓦渣坪窯黃釉陶、江南地方民窯白磁が代表的なものである。9世紀から11世紀にかけてのこの時期は上記ですでに述べたように官貿易は制度として存続し、すべての唐物は博多にはいるため、その輸入品は限られた地域にしかもたらされていない。現在まで確認できる遺跡は、太宰府鴻臚館跡、太宰府政庁跡、福岡筑後の平野部遺跡や薩摩などの西海道の国府跡、中国地方では周防などの国府跡、国分寺跡、畿内では平安京と西寺・広隆寺・仁和寺・法隆寺・薬師寺などに限られ、特に鴻臚館跡からは2,500片以上が検出されている。なお東日本では、宮城県多賀城外郭の五万崎遺跡から越州窯青磁などが数点出土しているのみである。

これらから出土の越州窯青磁は、12世紀のはいと、生産が衰退したようでその出土量は激減するが、この時期の出土例としては他を圧倒している。器種については、碗・皿・水注・合子・壺・唾壺および托である。このうち碗と皿の出土量は多く、かつ様々な形態がみられるが、壺などは器面に装飾を施したものは極めて少なく鴻臚館跡から出土したもののなかに彫花や釘彫のある破片が確認できるのみである。

長沙瓦渣坪窯の製品は、その出土例が少ない。すべて10世紀以前の輸入品であるが、久留米西谷火葬墓出土の壺、筑紫野市大門出土の水注、奈良薬師寺西僧房跡出土の水注、京都四条御前通遺跡出土の水注などがあげられる。

白磁については、この時期輸入された量そのものが少なく、種類も限定されている。滋賀大津市出土の水注や京都仁和寺八角円堂跡出土の合子などがある。

10世紀から11世紀にかけての輸入陶磁は輸入量及びその出土量は、極めて少なく分布もかなり限定された狭いものであることがわかった。しかし11世紀も後半から12世紀になると輸入陶磁は質量ともに豊富になってくる。確かに貿易形態の変革は大きな要因である。しかし、そのほかに経塚の影響もあげられる。仏教の思想である末法思想は天変地異が起こる末法の世を経て弥勒が出現し、人々を救済するとされるが、その時お経が滅んでいたのでは救われないとして、お経を保存する経塚が築かれたとされている。最古のものは藤原道長が金峰山に埋経をおこなった寛弘4年（1007）ものとされているが、11世紀後半以降、日本各地で盛んに経塚が築かれていく。この経塚に納められたお経の経容器や副葬品に輸入陶磁が用いられている。特に副葬品の合子や小壺類は白磁のものがほとんどで西日本から関東地方にかけての経塚に普遍的にみられている。

参考文献

1 大山喬平 1984 「中世の日本と東アジア」『講座日本歴史3 中世Ⅰ』 東京大学出版会  
2 田代 孝 1995 「古代の経塚―埋経の経塚―」『山梨の経塚信仰』 山日ライブラリー  
3 満岡忠成 1977 「宋瓷と日本文化」『世界陶磁器全集』12 小学館  
4 長谷部楽爾 1972 「請来美術（陶芸）」『原色日本の美術』 小学館

第3節 底部穿孔埋甕について

底部穿孔埋甕については1982年にまとめたことがあるが、その後1994年には長沢宏昌氏が別の視点からまとめている。82年の時点より資料が集積されたので、それらを加えて考察をしておきたい。縄文前期以降土坑内に土器を埋設することはよく知られており、埋葬施設という考えもあるが、確証の少ないものである。縄文中期では盛んに土坑内に土器が埋設される。釈迦堂S-1区の土坑群や塩山市柳田遺跡、北原遺跡の土器出土状況は驚きに値する。

底部穿孔埋甕の時期については触れていないが、一ノ坪遺跡のものが曾利新式第3段階に属するもので、底部穿孔埋甕としては、比較的新しい部分に属する。市川大門町宮の前遺跡、甲ッ原遺跡例のように屋外単独のものは曾利古式第1段階に属するもので、古段階に属するものは屋外単独埋甕である傾向が強く、曾利式古段階から新段階に移行する曾利式土器の最も盛行した時期に屋内埋甕として採用されてくると考えられる。

第8章に一ノ坪遺跡底部穿孔埋甕内の土の土壌分析結果が示されているが、埋葬施設としての確証はない。しかし、町田遺跡、釈迦堂遺跡の底部穿孔埋甕を数多く調査した経験からは、埋甕の中の土は締まりのほとんどないもので、埋甕内は空隙であったか、何らかの有機質が入っていたと思われる。また類例は少ないが釈迦堂遺跡では土製円盤3、土製薄円盤10点を出土した例がある。

埼玉県坂東山遺跡の後期初頭称名寺式の底部欠損逆位埋甕は成人骨が充填されており、成人骨改葬墓として認識されている。そうすると本県の屋外底部穿孔埋甕も成人骨改葬墓の可能性が高いのであるが、屋内のこうした埋甕については、民族事例からも共同体の成員として認められていない、乳幼児の墓ではないかと考えられる。

埋甕の分類は釈迦堂Ⅱの分類基準にもとづく。

- 1 場 所
  - 0 不 明      I 屋内出入口部      II 屋内その他      III 屋 外
- 2 埋甕の状態
  - A 不 明      B 正 位      C 逆 位      D その他
- 3 埋甕の底部の状況
  - 0 不 明      1 底部あり      2 底部穿孔      3 底 抜      4 底 欠
- 4 埋甕の口辺部の状況
  - a 不 明      b 口辺完存      c 口辺部一部欠損      d 口辺部斜位欠損      e 口辺部水平欠損
- 5 石蓋の有無
  - 0 無      1 有

参考文献

1 小野正文 1984 「底部穿孔埋甕小考」『甲斐の地域的展開』 雄山閣  
2 長沢宏昌 1995 「甲府盆地にみられる縄文時代中期の土壌墓と土器棺再葬墓——井戸尻Ⅲ式～曾利工式期の土器——」『研究紀要』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

| 遺跡名 | 遺構名    | 所在地    | 分 類       | 時 期 | 文 献 | 備 考 |
|-----|--------|--------|-----------|-----|-----|-----|
| 住 吉 | 2号住居址  | 都留市法能  | I C 2 c 0 | 曾利新 | 1   |     |
| 久保地 | 12号住居址 | 都留市久保地 | I C 4 b 0 | 〃   | 2   |     |
| 〃   | 〃      | 都留市久保地 | I C 2 b 0 | 〃   |     |     |
| 〃   | 23号住居址 | 都留市久保地 | I C 4 e 0 | 〃   |     |     |